

第二章 明石の物語 明石の姫君誕生

[第一段 宿曜の予言と姫君誕生]

まことや(それはそうと)、「かの明石に、*心苦しげなりしことはいかに(あの明石の姫の出産準備はどうなっているだろうか)」と、思し忘るる時なければ(源氏はお忘れになる事は無かったものの)、公、私いそがしき紛れに、え思すままにも(思うようには)訪ひ(とぶらひ、御手紙で消息を御訪ね為さる)たまはざりけるを(事は御座いませんでしたが)、三月朔日のほど(やよひのついたちのほど、三月初旬に)、「このころや」と思しやるに(そろそろかと御考えになり)、人知れずあはれて(我が子なればさすがに気になさって)、御使ありけり(使いを御立てに為りました)。*「心苦しげなりし」については、注に<明石の君の妊娠をさす。「六月ばかりより心苦しきけしきありてなやみけり」(明石)とあった。>とある。

とく帰り参りて(使いは直ぐに帰って参りまして)、「*十六日になむ。女にて、たひらかにものしたまふ(十六日の御出産でした。女の子で安産で御座います)」と告げきこゆ(と源氏に報告いたします)。*注に<使者の詞。三月十六日、明石の姫君誕生。「なむ」係助詞、結びの省略、文は切れる。>とある。簡潔な文で大筋を語る、この作者らしい書き方に見える。

めづらしきさまにてさへあなるを思すに(女兒で安産だという大変な御目出度御度であった事を御思いになると)、おろかならず(源氏の喜びは大きかったのです)。「などで、京に迎へて、かかることをもせさせざりけむ(どうして姫を京に迎えて御産させなかったのだろう)」と、口惜しう思さる(残念にお思いでした)。「めづらしきさま」について、注に<女子を重んじた当時の貴族の考え方>とあるが、確かに女が子を儲ける事によって其の実家たる後見家に権勢は大きく動いた時代のような。

宿曜(すくえう、占星術の暦)に、「御子三人(みこさんにん、御子様は三人で其の内に)。帝、后かならず並びて生まれたまふべし(天皇と皇后は必ず一人づつ御就きに成ります)。中の劣りは(もう御一人は)、太政大臣にて位を極むべし(総理大臣となって位人臣を極めることでしょう)」と、*勘へ申したりしこと(かんがへまうしたりしこと、易学者が源氏の儲けを見立てていたことが)、さしてかなふなめり(其の通りに適うかのようです)。*「勘へ申したりし」については、注に<「し」過去の助動詞。源氏がかつて聞いたというニュアンス。今、初めて語られる。「なめり」連語、「なる」断定の助動詞、「めり」推量の助動詞、主観的推量、のようであるというニュアンス。源氏が合点しているように語る。>とある。ということは此の目出度い見立ては当然ながら、故院の御代の源氏および左大臣家が権勢を振るっていた時に御用学者が持ち上げたものだろう。ただ、それにしても源氏の臣籍降下とは即ち非親王化は元服前の幼少期に高麗の相人の観立てに当意した父帝が光君に源氏を名乗らせる時点で既に確定していたのだから、「御子三人帝后かならず並びて生まれたまふべし」という源氏の儲けに対する宿曜の此の内容は不穏なほどの持ち上げぶりにも見える。電灯の無い時代に於いて、免れ難い暗闇の中に物の怪を実感していた人々にとって、陰陽師や易学者の説得力は相当に圧倒的だったのだから、それらの学者はさぞ右大臣家から迫害されただろうと想像できる。まして王家とは即ち源氏や兄弟帝や弟宮などは神のお告げを授かる神主の血筋であつてみれば、占いで示された因縁を深く心に刻む事は、理屈を知るのではなく運命を知ることとなり、其の訓えで生き方を定めるという重さで、其等の易を受け止

めたのかも知れない。実際にこの物語に於いても、光る源氏君の方向性は高麗の相人の見立てに規定されたという書き方で桐壺巻から貫かれている。占いで全てが決まるとまでは言わないが、大きな方向性は示されたらしい当時の時代性を出来るだけ感じ取らないと、読み手の方が損をするということなのだろうか。そして今、物語は此処で大きな転換点に差し掛かって、どうやら新たな方向性が示されそうだ。

おほかた(結局の処は)、上なき位に昇り(かみなきくらゐにのぼり、源氏は最上位の官職に御就きになり)、世をまつりごちたまふべきこと(国政を執り治め為さるであろうと)、さばかりかしこかりし(決まり事のように観立てていた)あまたの相人どもの聞こえ集めたるを(多くの易学者たちが申し合っていたのを)、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消ちつるを(御自身はここ数年は不遇ゆえにすっかり忘れて居らしたが)、当帝の(たうだいの、今上帝に)かく位にかなひたまひぬることを(弟宮が即位なされた事を)、思ひのごとうれしと思す(願いが叶ったものとして嬉しく御思いに為って御出です)。

みづからも(光君は御自分でも)、「もて離れたまへる筋は(既に離れた皇籍に戻って帝位に就く事は)、さらにあるまじきこと(決して有り得ない事)」と思す(とお思いだったのです)。「あまたの皇子たちのなかに(故院は多くの御子の中で)、すぐれてらうたきものに思したりしかど(特別に自分を可愛がって下されたが)、ただ人に(ただうどに、あえて自分を親王から臣籍降下させて臣下に)思しおきてける御心を思ふに(仕為された故院の御心を考えると)、宿世(すくせ、私は皇位継承する運命に)遠かりけり(元々縁がなかったのだ)。

内裏の斯くて御座しますを(うちのかくておはしますを、帝位にこうして弟宮が御就きあそばしたことは)、あらはに人の知ることならねど(真相は誰も知る所ではないが)、*相人の言(そうにんのこと、易学者の予言は)むなしからず(外れていなかった)」と、御心の内に(みこころのうちに、内心では)思しけり(御思いでした)。 *「相人の言」とは「御子三人帝后かならず並びて生まれたまふべし」と「おほかた上なき位に昇り」とであり、傍目では何れも<遠からずとも当たらず>だったが、源氏と入道宮だけには<少なくとも一部は当たった>事が判った、訳だ。

今(いま、そして今度は明石の君に女兒が授かった事を受けて)、*行く末のあらましごとを思すに(末は其の子が后になるのかと御思いになると)、 *「ゆくすゑのあらましごと」は<先々に在るで有ろう事柄>という古語ながら其のままでも現代語として通じる言い方だが、之が当時の宮中の読者を神の視点に立たせる優遇記述だったであろう事を斟酌せずには居られない。神の御利益は現代の一般人が思うような絵空事とは違い、御祓いが国家行事だった時代の王家の物語であってみれば、正に啓示である。詰まりは只の可能性としては無く予告として、明石の君の生んだ女兒が何れかの天皇の後に成る事と其処まで物語が続く事、が読者に示された事に為る。ま、現代人にとっても御払いに靈験を求める心情は今尚その根源的な真実という意味合いを失ってはいないのかも知れない。現存する神社に特別な価値を感じ、其の存続に特別な優遇を許容しようと思うのは私だけでは無いだろう。ただ、詔を発する權威の拠り所が「核抑止力」だと言う今日に於いては、残念ながら祝詞に<問題解決力が有る>とまでの心酔は得る可くも無い。

「*住吉の神の標(しるべ、御導きで)、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて(実に明石の姫も後の母御という並外れた運勢を授かったので)、ひがひがしき親も(王家に偏執していた姫

の親の明石入道も)及びなき心を(分不相応な願いを)つかふにやありけむ(掛けた甲斐が在ったとでも言うものだろう)。*「住吉の神」については明石巻の冒頭で、嵐を凌いだ源氏が畿内の鎮守たる住吉社に禊ぎを願い奉った、という重要な記述が在った。其処では源氏の認識として、祝詞の大祓を下敷きにして「住吉神」を<穢れを清めて再生させる力=清みの江>として考えていることが語られていた。また、同じ明石巻の終盤では兄弟の想いとして「記・紀」の故事が取り上げられたが、イザナキとイザナミの国造りで最初に産み落とされたのは住之江の淡路島である。さすれば大和朝廷の成立に当該地域もしくは其処に因む豪族が決定的な役割を果たしたような気もするが、一方では明石入道の経緯として中央貴族が態々地方の受領を志願したとも語られていて、その明石入道が「住吉神」を<水神>として崇めていた事を考えると、元々が「住吉神」は海産や海運の守護神として蓄財の象徴であったように見える。したがって当時の平安朝廷に於いても、「住吉神」は相当程度の財力を意味していたに違いない。となれば、結局は経済が世界を成り立たせるという今日の認識と変わらず、それだけに当物語は今日でも説得力があるのだろう。尤も是は認識と言っても、厳密な統計や分析に基いた結論というよりも、実態を漠然と述べただけかも知れないが、素朴であっても事象推移を直感的に把握する其の素直さは意外に雄弁である。

さるにては(そうであってみれば)、かしこき筋にもなるべき人の(皇后という畏れ多い血筋にも成ろうと言う人が)、あやしき世界にて生まれたらむは(由緒もあやふやな田舎で生まれたと言うのは)、いとほしうかたじけなくもあるべきかな(何とも勿体無く申し訳無いとも言うべきほどの事だ)。このほど過ぐして迎へてむ(娘はよくよく準備してから都へ迎える事にしよう)」と思して(と光君は御思いになって)、*東の院(ひんがしのゐん、二条院東隣の邸宅を)、急ぎ造らすべきよし(早く造営させるようにとの)、もよほし仰せたまふ(催促を御言い付け為さりました)。*「東の院」については源氏は、先に「花散里などやうの心苦しき人びと住ませむ」と意図して<二なく改め造らせたまふ>と記述されていたが、その造営には后候補の娘を住まわせるという更に重要な理由が加わった事になる。

[第二段 宣旨の娘を乳母に選定]

さる所に(明石には)、はかばかしき人しも(后候補の養育を心得たような人などは)ありがたからむを思して(居ないだろうと源氏は御考えになって)、故院にさぶらひし(父帝に仕えて)宣旨の娘(せんじのむすめ、伝言係を務めた女房の娘で)、宮内卿の宰相にて(くないきやうのさいしやうにて、宮内省長官の参議だった)亡くなりにし人の子なりしを(故人を父とする子であり)、母なども亡せて、かすかなる世に経けるが(細々と暮らしていたものが)、はかなきさまにて子産みたりと(有力者の正妻といったような身分安堵も無い形で子を産んだと)、聞こし召しつけたるを(御聞きになって居らしたが)、知る便りありて(其の娘を良く知る伝手になる者が居たので)、ことのついでに(乳母に適任かと)まねびきこえける人召して(源氏に其の娘の話を書かせた女房に言い付けて)、さるべきさまにのたまひ契る(然るべく手配させ為さり話を付けました)。

まだ若く、何心もなき人にて明け暮れ(其の娘はまだ若く特に出世も考えずに日々を過ごして)、人知れぬあばらやに眺むる心細さなれば(訪れる者も無い粗末な家で退屈な細々とした暮らしだったので)、深うも思ひたどらず(乳母の務めや明石の地方下りについて深く考えることも無く)、この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて(光君に近づく事を華やかな事と簡単に考えたようで)、参るべきよし申させたり(乳母のお勤めを引き受ける旨を取次ぎの女房に答えさせて来ました)。

いとあはれにかつは思して(光君は参議の娘ほどの身分の者ながら両親に先立たれたばかりに乳母を引き受けてくれたものと其の娘を不憫にも御思いに為って自ら訪ねてから)、出だし立てたまふ(其の娘を明石のような地方下りに出立させ為さったのです)。

ものついでに(とはいえ公式に訪ねては大袈裟なので他の用事の序でという事で)、いみじう忍びまぎれておはしまいたり(ごく内密に紛らわしてお出掛けになりました)。さは聞こえながら(娘の方も引き受けるとお答えしたものの)、いかにせましと思ひ乱れけるを(どうしたものかと後悔していた所に)、いとかたじけなきに(勿体無い殿直々の御出ましと在って)、よろづ思ひ慰めて(万事胸に収めて)、「ただ、のたまはせむままに(全て仰せの通りに)」と聞こゆ(と御答え申します)。

吉ろしき日なりければ(すると吉日だったので)、急がし立てたまひて(光君は其の日の内に娘を明石に急がせて出発させ為さる事にして)、

「あやしう、思ひやりなきやうなれど(急な事で貴方の事情を省みないようだが)、思ふさま殊なることにてなむ(之には特別な思惑が在っての事なのです)。みづからも(私自身が)おぼえぬ住まひに結ばほれたりし(慣れぬ田舎暮らしを過ごしたと言う)例を(ためしを、前例を)思ひよそへて(考え合わせて)、しばし念じたまへ(しばし辛抱してください)」など、ことのありやう詳しう語らひたまふ(事の次第と明石の事情を詳しく御話しに為りました)。

主上の宮仕へ(うへのみやづかへ、宣旨の娘は帝付きの御勤めを)時々せしかば(時々していたので)、見たまふ折もありしを(光君は以前にも見かけた事は在ったが)、いたう衰へにけり(ずいぶんやつれて居ました)。家のさまも言ひ知らず荒れまどひて(家の様子も言い様も無く荒れ果てて)、さすがに大きな所の(それでも広い屋敷だったが)、木立など疎ましげに(木立などが鬱蒼として)、「いかで過ぐしつらむ(相当な貧乏暮らしのようだ)」と見ゆ(と思われまふ)。

人のさま(ただ娘本人は)、若やかにをかしければ(若々しく美しいので)、御覧じ放たれず(光君は御見過ごしに為りません)。とかく戯れたまひて(すぐ御不遜戯に為って)、

「取り返しつべき心地こそすれ(明石行きを取り消して側に置きたい気がするが)。いかに(どうだろう)」とのたまふにつけても(と光君が仰れば)、

「げに(本当に)、同じうは(どうせなら)、御身近うも仕うまつり馴れば、憂き身も慰みなまし(殿の御側近くに御仕え出来れば不運な身の上も慰められましように)」と見たてまつる(と御答え申し上げます)。

「かねてより隔てぬ仲とならねど、別れは惜しきものにぞありける (和歌 14-01)

「深い仲とは言わないが、別れと成ると名残惜しい (意識 14-01)

慕ひやしなまし(したいやなまし、追い掛けて行こうかな)」とのたまへば(と光君が軽口を御利きに為ると)、うち笑ひて(娘は微笑んで返します)、

「うちつけの別れを惜しむかことにて、思はむ方に慕ひやはせぬ」(和歌 14-02)

「出任せの様に言うけれど、行く先に誰が居るのやら」(意識 14-02)

馴れて聞こゆるを(光君は娘の馴れた返歌ぶりに)、いたしと思す(至って感心なさいます)。

[第三段 乳母、明石へ出発]

車にてぞ京のほどは行き離れける(乳母の宣旨の娘は牛車で京の市中は進んで行きました)。いと親しき人さし添へたまひて(ごく内輪の者だけを従者として)、ゆめ漏らすまじく(この乳母の明石行きを決して他人に知られないように)、口がためたまひて遣はず(固く口止めてして出発させたのです)。御佩刀(おんはかし、幼子の守り刀や)、さるべきものなど(祝いの品々など)、所狭きまで思しやらぬ隈なし(盛り沢山で行き届かない物はありませんでした)。乳母にも、ありがたうこまやかなる御いたはりのほど浅からず(有難い心配りが十分に施されました)。

入道の思ひかしづき思ふらむありさま、思ひやるも、ほほ笑まれたまふこと多く(光君は明石入道がどんなに喜び女兒を大事に育てようとしているかを思い遣るのも微笑ましく思われ)、また、あはれに心苦しうも、ただこのことの御心にかかるも、浅からぬにこそは(また光君自身も感慨深く胸が詰まるほどに女兒の事ばかりが御気に掛かるというのは、余程浅からぬ宿縁の生せる業に違いありません)。御文にも、「おろかにもてなし思ふまじ」と、返す返すいませたまへり(御手紙にも「女兒にはゆめゆめ粗相の無い様に」と返す返す念押しなさって次の歌が認められていました)。

「いつしかも、袖うちかけむをとめ子が世を経て撫づる岩の生ひ先」(和歌 14-03)

「早く会いたい我が乙女、末永い幸を乞い願う」(意識 14-03)

*注に<源氏の独詠歌。「君が代は天の羽衣まれに着て撫づとも尽きぬ巖ならなむ」(拾遺集賀、二九九、読人しらず)を踏まえる。姫君の長寿を祝い、早く迎えて育てたいという歌の意。>とある。しかし是は御文に認めた歌なのだから<独詠歌>では無く<贈歌>の誤記とは思うが、必脚である。ただし、この引き歌の紹介がというよりも其の下敷きにある仏法の紹介が、必脚なのである。引き歌は「君が代は(今上帝の御代は)天の羽衣まれに着て撫づとも(天津乙女が三年に一度づつ舞い降りて羽衣が触れると)尽きぬ巖ならなむ(いつかは磨り減って無くなる大岩と同じだけ長く続く事でしょう)」というヨイショの祝言だが、是は仏法の「劫」を踏まえている。Wikipedia に「一劫」はインド哲学の時間単位で 43 億 2000 万年と紹介されていたが、此处でいう「劫」は長時間の比喩であり国歌「君が代」と同根であり、長寿を願うという事では落語の「寿限無」に「五劫の擦り切れ」としても出て来る、とのこと。「五劫」の「一劫」が先出の「大岩が磨り減ってなくなる時間」で、それが五回繰り返す時間という気の遠くなる長期間というから、

如何にも落語には持って来いだ。もし「五劫」を真面に 216 太陽億年と計算すると、現在の計測で計算されている 200 億年という宇宙寿命とも妙に符合してしまいそうで面白い。なお、仏法では「大岩」は四十里四方(現代換算で一辺 20 km の立方体)という大きさらしい。ともあれ、源氏は我が乙女子を天女に準えて、この歌を詠んだのだろう。「いつしかも袖うちかけむ」は、源氏が「早く袖の中に囲いたい＝手元に置きたい」という「乙女子」の形容修詞であると同時に、乙女子が天女のように「何度も羽衣の袖を触れ掛けて」という形容動詞の複意にもなっていて、後句の「世を経て撫づる岩の生ひ先(何年もかかって磨り減る岩のように長命でありますように)」を導いている。

*津の国までは舟にて、それよりあなたは馬にて、急ぎ行き着きぬ。 *「津の国」は畿内の隅で「須磨」のある「摂津、摂州」であり、「それよりあなた」とは畿内を出て山陽道の「播磨」に入り「明石」までは馬で急いだ、ということらしい。荷物の多い女旅なら「明石」まで水路を用いた方が良さそうに思うので、秘匿の為なのか方位学的見地からなのか不明だが、何故そうしたのかは良く分からない描写である。

入道待ちとり、喜びかしこまりきこゆること、限りなし(入道はこの一行を待ち受けて畏まって感謝申し上げること最大限の歓待振りでした)。そなたに向き拝みきこえて(京に向かって拝礼申し上げて)、ありがたき御心ばへを思ふに(源氏の有難い御厚情を思うと)、いよいよいたはしう(更に其の御配慮に感激して)、恐ろしきまで思ふ(恐れ多い事と考えるのです)。

稚児のいとゆゆしきまでうつくしうおはすること、たぐひなし(稚児がとても此の世のものとも思えないほど美しく御出でなのは例えようも在りません)。「げに(確かに是なら)、かしこき御心に(殿が御賢明にも)、かしづききこえむと思したるは、むべなりけり(大事に養育なされようと御考えになるのは当然でしょう)」と見たてまつるに(と乳母は推察奉って)、あやしき道に出で立ちて(軽率にも惨めな地方下りに旅立ってしまったという)、夢の心地しつる嘆きもさめにけり(悪夢のような懸念も醒めました)。いとうつくしうらうたうおぼえて、扱ひきこゆ(乳母は稚児をととても可愛いがって労わりを持って御世話申します)。

子持ちの君も月ごろ(子持ちとなった明石の君も此処数ヶ月は光君が京で多忙の所為か音信も途絶えがちで)、ものをのみ思ひ沈みて、いとど弱れる心地に、生きたらむともおぼえざりつるを(物思いに沈むばかりで塞ぎこんで生きた心地もしなかつた所に)、この御おきての(乳母を御寄越し下された光君の今の御配慮で)、すこしもの思ひ慰めらるるにぞ頭もたげて(幾分かは見捨てられる懸念を晴らせられるという事で気を取り直して)、御使にも二なきさまの心ざしを尽くす(乳母を送り届けた使者にも最上の持て成しを致しました)。とく参りなむと急ぎ苦しければ(使者は早く帰参して殿に御報告しなければならぬと訴えますので)、思ふことどもすこし聞こえ続けて(明石の君は思いの丈を使者に少し言付け足して)、

「ひとりして撫づるは袖のほどなきに、覆ふばかりの蔭をしぞ待つ」(和歌 14-04)

「この細腕は知れたもの、その大胸に抱かれない」(意識 14-04)

*注に「明石君の返歌。源氏の「袖」「撫づる」の語句を受けて返す。」とある。此処での「袖の程」は「器量の大きさ」で、其れが「ひとりして撫づるは(自分独りだけで稚児の養育に手を掛けてみても)」「ほどなきに(大した事が無いの

で)、殿の「覆ふばかりの蔭をしぞ待つ(溢れるような偉大な庇護こそを期待いたします)」という哀願である。

と聞こえたり(と申して来ました)。あやしきまで御心にかかり、ゆかしう思さる(光君は非常に御気掛かりに御成りで母子に早く会いたいと御思いに為りました)。

[第四段 紫の君に姫君誕生を語る]

*女君には(光君は二条院の夫人には寝物語で)、言にあらはして(言葉に表しては)をさをさ聞こえたまはぬを(明石の君の出産を御話し申してはいらっしやらなかったが)、聞きあはせたまふこともこそ、と思して(他から御聞き合わせになつては却つて御機嫌を損ないかねないと御考えになり出産の概要を打明けなさつて)、 *此处での「女君」は<正妻>を示していて、即ち「二条院の君」であり「紫の君」のことで、殊更に絡みの描写ではないようだが、それでもやはり濡れ場の<寝物語で>という闇での描写には違いない。

「さこそあなれ(そういうことのように)。あやしうねぢけたるわざなりや(不思議に捻じれた事に成るものですね)。さもおはせなむと思ふあたりには、心もとなくて(子を儲けたいと思う貴方には思うように成らず)、思ひの外に、*口惜しくなむ(意外な所に子が出来たとはいかに心外な事です)。女にてあなれば、いとこそ物しけれ(女の子という事で全く以ってつまらない事です)。 *「口惜しくなむ」とは何事か。心当たりがある仕業をして置いて良くもこういう物の言い方が出来たものだが、男の言い訳とは所詮こんなものだろう。「女にて物しけれ」も明石入道や明石の君には口が裂けても言えない言葉だろうし、源氏自身も女兒だったからこそ喜んでいて。こういう言い方は夫人の気を和らげる為の一種の卑下の気持ちの表れだろうが、所詮は男の一方的な計算であり、事態自体を微塵も誤魔化せるものではない。女は男の愛敬を受け入れて許すなどと言う事は絶対に無く、ただ事態を諦観するだけである。そして自分の立場上で今後の対応を計算する。結果として丸く収まるかどうかは事態の推移次第だが、夫人が激昂する性格でなかったから光君はこういう切り出し方をした、ということなのだろう。

尋ね知らでもありぬべきことなれど(知らん顔をして置いても良さそうですが)、さはえ思ひ捨つまじきわざなりけり(さすがに其れは親としてとても放つては置けないことです)。呼びにやりて見せたてまつらむ(呼び寄せて貴方にも御会いさせようと思ひます)。憎みたまふなよ(嫌がらないで下さいね)」と聞こえたまへば(と御話し申しなさると)、面うち赤みて(おもてうちあかみて、夫人は御顔を紅潮させて)、

「あやしう(変な御話しですね)、つねにかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ(いつも他の女の事は気にするなという事を言い付けられる私の気持ちのほうこそ)、われながら疎ましけれ(我が身ながら整理するのが面倒です)。もの憎みは、*いつならふべきにか(それでは嫌な顔は何時したら良いと言うのでしょうか)」と怨じまたへば(と皮肉を言いなさると)、いとよくうち笑みて(光君は思わず笑みをこぼして)、 *「いつならふべきにか」という子供っぽい口調は紫の君だからこそ可愛らしさ、なのだろう。だからこそ源氏は思わず微笑んだ、のだろう。下手すると不気味でもある。

「そよ(そのことですよ)。誰がならはしにかあらむ(誰が嫌な顔などして良いものなのでしょうか)。

思はずにぞ見えたまふや(良くない事なんじゃないでしょうかね)。人の心より外なる思ひやりごととして(妙な事を邪推して)、もの怨じなどしたまふよ(勝手に恨んでいるという事になりますよ)。思へば悲し(悲しい事です)」とて(と云っては)、*果て果ては涙ぐみたまふ(挙句に涙ぐんだ仕草を見せなさいます)。*「果て果ては(仕舞いには到当)」という言い方には、語り手が源氏の小芝居に半ば呆れているという様子を窺がわせる演出を感じる。そのことで二人の仲睦まじさを表現しているのだろう。その和やかさを受け入れた紫の君が以下のように気持ちを整理した、ということらしい。

年ごろ飽かず恋しと思ひきこえたまひし御心のうちども(留守を守ったこの数年来にずっと恋しく思い申した二人の互いの御気持ちや)、折々の御文の通ひなど思し出づるには(何かと時々心を通わせた御手紙などを思い出しなさって)、「よろづのこと、すさびにこそあれ(旅の上での殿の女遊びの全てはただの憂さ晴らしだったに違いない)」と*思ひ消たれたまふ(と夫人は気持ちを落ち着け為さる事が出来たのです)。*「おもひけたれたまふ」は懸念の私拭ではない。夫人は殿が今此処に居るといふ現状を受け入れたのであって、光君の女遊びや明石の君や其の女兒の存在を納得したのではないだろう。如何にも済し崩しの構造に見えるが、権力者ならではの閨の所業とも思えるイヤラシサである。

「この人を、かうまで思ひやり言問ふは(明石の女のことをこう打明けてまで世話して見舞うのは)、なほ思ふやうのはべるぞ(別の思惑が在っての事です)。まだきに聞こえ(今から其の思惑までを御話し申しても)、またひが心得たまふべければ(また貴方は変に勘繰るかもしれないので)」とのたまひさして(と光君は言い差したまま話を変えて)、「人がらのをかしかりしも(あの女に興味を持ったのも)、所からにや、めづらしうおぼえきかし(貴方の居ない田舎暮らしで目移りしたまでです)」など語りきこえたまふ(などと夫人に語り申しなさいました)。

*あはれなりし夕べの煙(別れ間際の情緒ある夕方の生活を思わせる煙やら)、言ひしことなど(そこで詠んだ歌などや)、まほならねど(それまでは真面に見知らなかったが)、その夜の容貌ほの見し(其の夜には顔かたちを垣間見た明石の君の)、琴の音のなまめきたりしも(琴の音の優雅だった事にも)、すべて御心とまれるさまに(すべて心惹かれたままに)のたまひ出づるにも(光君が思い出しては御話しなされるにつけても)、*此処の記述は明石巻で光君の帰京が「明後日ばかりになりて例のやうにいたくも更かさで渡りたまへり」時の描写をそのまま受けている、らしい。作文技巧的には後の紫の君の歌の前振りではあるようだが、是が寝物語である所はイヤラシサの真骨頂だろう。よくも抜け抜けと惚気話を妻に出来たものだが、この色遊びを王朝絵巻の優雅な風情として楽しまない、この源氏物語を読んだ事には成るまい。というのも、源氏の子の儲けについては「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし、中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と易を立てられていて、紫の君は其処には関与しない事が、光君には分かって居る。しかし、どこまでも可愛らしいこの子供っぽさの抜けない夫人が光君にとっては、藤壺の幻影を含めて実際に抱ける女としては今や最愛の存在である。「所からにや愛づらしう」明石の女は貴方の代わりなのだ、と、光君は寝物語で夫人に因果を含めたかったに違いない。紫の君自身は其の事情を知る由も無く、光君の寝物語は済し崩しの言い訳に過ぎなく聞こえたのかもしれないが、あえてこの語りを記述する事で、理不尽を含んだ存在こそが全ての始まりとでも言いたげな一貫した作者の姿勢が強調されている、ように思う。

「われはまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか(私は殿の御不在を例え様も無く悲しいと思ひ嘆いていましたが)、すさびにても、心を分けたまひけむよ(殿は憂さ晴らしとはいえ明石の女と心を

通わしなさっていたのですね)」と(と夫人は光君の話から)、ただならず、思ひ続けたまひて(心穏やかならず次々と御思いに為って)、

「われは、われ(私は明石の女ではありません)」と、うち背き眺めて(背を向けて物思いがちに)、
「あはれなりし世のありさまかな(なんて情けないこの世の成り行きなんでしょう)」と、独り言のやうにうち嘆きて、

「思ふどちなびく方にはあらずとも、われぞ煙に先立ちなまし」(和歌 14-05)

「なびき合えない煙なら、いっそ先立とうかしら」(意識 14-05)

*注に<紫の君の歌。『集成』は「前に、源氏が「あはれなりし夕の煙、言ひしことなど」を語り出した時、明石の上の返歌の前に、当然源氏の贈歌を語っているはずであるから、それを受けて詠んだのである。すなわち「このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じかたになびかむ」(和歌 13-16)に応じたもの」と注す。「思ふどち靡く方」「煙」は源氏の「煙」「同じ方」を受けた表現。「なまし」連語、完了の助動詞「ぬ」未然形「な」+仮想の助動詞「まし」。非現実的な事態についての推量を強調して表す。死んでしまいたいものです。>とある。適注だろうし、必脚である。<(和歌 13-16)は私注。>

「何とか(すると光君は、何という事を仰いますのか、)。心憂や(縁起でも無い、と仰り、)。

誰れにより世を海山に行きめぐり、絶えぬ涙に浮き沈む身ぞ (和歌 14-06)

誰を思つて苦勞して、此処に戻つて来た事か (意識 14-06)

*注に<源氏の返歌。「うみ」に「憂み」と「海」を掛ける。「海」と「浮き沈み」は縁語。反語表現。みなあなたのために辛抱してきたのです、の意。>とある。

いでや(それでは)、いかでか見えたてまつらむ(私の真心の程を御見せ致します)。命こそ適ひ難かべいものなめれ(いのちこそかなひがたかべいものなめれ、命こそ掛け替えの無いものではありませんか)。はかなきことにて、人に心おかれじと思ふも(つまらない事で貴方に誤解されたく無いと思うのも)、ただ一つゆゑぞや(本当に大事に思っているからなのですよ)」

とて(とまで仰つて)、箏の御琴引き寄せて、搔き合せすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど(夫人にも弾く様にと仕向けなさいましたが)、かの、すぐれたりけむもねたきにや(かの明石の君が優れた弾き手らしいことが癪に障ったのか)、手も触れたまはず。

いとおほどかにうつくしう、たをやぎたまへるものから(とてもおっとりして美しく柔らかな物腰ながら)、さすがに執念きところつきて(しふねきところつきて、執念深い所があつて)、もの怨じしたまへるが(嫉妬なさっているのが)、なかなか愛敬づきて(平然としているよりも寧ろ可愛げがあつて)腹立ちなしたまふを(夫人が腹立てていらっしゃるのを)、をかしう見どころあ

りと思す(光君は面白がって張り合いがあると御思いでした)。

[第五段 姫君の五十日の祝]

「五月五日にぞ、*五十日には当たるらむ(ごぐわちのいつかのぞいかにはあたるらむ、五月の五日あたりが御食い初めの祝いの日に当たるだろう)」と、人知れず数へたまひて(光君は自分なりに日数を数えなさって)、ゆかしうあはれに思しやる(乙女子を祝ってやろうと御思いに為ります)。*「五十日(いか)」については「五十日の祝い」として大辞泉に<子供が生まれて50日目に行った祝い。父や外祖父などが箸を取って、赤子の口に餅(もち)を含ませる。平安時代に、主として貴族の間で行われた。いか。>とある。儀式としては貴族のものだったのだろうが、親の気持ちとしては今日で言う「御食い初め」のことらしい。「御食い初め」は生後百日ぐらいが一般的らしいが、いずれにしても離乳食もまだ受け付けない歯も無い赤ちゃんの口に生育の無事を祈って形だけ箸をつける事には変わりはない。

「*何ごとも、いかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし(もし女兒が紫の君の儲けでこの二条院に居たなら、どんな事でもどんなにか立派に祝ってやれて嬉しかった事だろう)。口惜しのわざや(残念な成り行きだ)。さる所にしも(あんな田舎で)、心苦しきさまにて、出で来たるよ(諸事不自由な事情で生まれて来たものだ)」と思す(と御思いになります)。*注に<以下「出で来たるよ」まで、源氏の心中。下に反実仮想の助動詞「まし」がある構文。もし、京で誕生したのならという仮想のもとに残念に思う。>とある。省略にも程が有る、と思える文で、私は欠落を強く疑う。

*男君ならましかば、かうしも御心にかけてたまふまじきを(男の子であったならば是程までは御気に為さらなかったかも知れませんが)、「かたじけなういとほしう(子供には申し訳なく可哀相だ)」、*わが御宿世も(御自身の天命としても)、この御ことにつけてぞ(この后を予言された女兒を儲ける為に)かたほなりけりと思さるる(須磨と明石への流離という不遇な目に遭ったのだろうと光君は御考えに成ったのです)。*この文については「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし、中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」という宿曜の易を受けて、光君がこの女兒を後の天運を持った子と考えた事を示している、とは思う。しかし一般論として考えてみても、光君自身は王家血筋とはいえ今や臣籍降下した源氏という身の上での子の儲けについては<男児では王家血筋に連なる目は無い>ので、当然にも組織管理者として武に励ませると共に組織内部の誇りを担って華美を競わせると同時に外部組織との社交を担う階層たる貴族として生きるべく諸教養は身に付けさせるだろうが、基本的に生き方については放任で本人の能力を待つ他は無い筈で、光君が実子を帝位に就かせたのは弟宮に仕立てたインチキによるもので公式には絶対に親子を名乗れない事情だが、<女兒なら王家血筋に連なる目も有る>ので養育には重大な関心を寄せる事に成る、という当時の政治力学の認識を踏まえても居るのだろう。*「わが御宿世(おんすくせ)」の文については<「ぞ」係助詞、「かたほなりけり」を飛び越えて、「思さるる」連体形に係る。『集成』は「ご自身のご運勢も、このお方の誕生のために、一時欠けることもあったのだとお考えになる。須磨、明石の流離は、立后を予言されている姫君誕生をもたらすためだったと思う」。完訳「ご自分の運勢も、この姫君出生の御事のために禍があったのだと、お考えになる」と注す。>と注にある。確かに身分制度階級社会に於いての易診立ての重さは、改めて注意しておくべきかもしれない。「かたほ」は<傾き、不整合>といった意味合いらしく、「平坦でない事情」という言い方のようだ。

御使出だし立てたまふ(そこで光君は祝儀の使者を明石に遣わせなさいました)。「かならずそ

の日違へずまかり着け(必ず祝いの当日に着くようにせよ)」とのたまへば(と光君が仰ったので)、五日に行き着きぬ(使者は五日に明石のお邸に到着しました)。思しやることも(祝いの品としてご配慮なされた物は)、ありがたうめでたきさまにて(贅沢で立派に見映えして)、まめまめしき御訪らひもあり(実用的な贈り物もありました)。

「海松や時ぞともなき蔭にゐて、何のあやめもいかにわくらむ (和歌 14-07)

「遠い明石を懐かしく、せめて心で祝いたい (意識 14-07)

*注に<源氏の贈歌。「海松(うみまつ、海辺の松)」は姫君を喩える。「松」は生い先長いことを予祝するもの。「あやめ」は五日の節句「菖蒲」に因む。また「文目」を掛ける。「いか」は「五十日」と「如何」を掛ける。姫君へのお祝いと心遣いの歌。>とある。「あやめ」は今日では植物分類で言うユリ目アヤメ科の「花菖蒲」や「アヤメ」を指すらしいが、平安当時から江戸時代までは正に端午の菖蒲湯に使うサトイモ目ショウブ科の「菖蒲」の事を指していた、との事。「文目(あやめ)」とは「筋目」の意味だが、「菖蒲」の葉が鋭く筋立っていることが之の命名由来との説があるらしい。通せば歌意は、「海松や(明石の海辺に居る幸を願う我が乙女子は)時ぞともなき蔭にゐて(今こそと言う晴れがましきも無い田舎暮らしなので)何のあやめも(端午の節句の時期と成っても御食い初めの祝儀の次第が判然としないので)いかにわくらむ(如何したものかと戸惑います)」という母子の地方暮らしへの労りと便りの覚束無さへの不満を吐露したもの、かと思う。

心のあくがるるまでなむ(心は其方に行っている様なものです)。なほ、かくてはえ過ぐすまじきを(やはり此の様に離れていては良くないので)、思ひ立ちたまひね(京へ出て来る決心をして下さいな)。さりとも、うしろめたきことは(上京して心配するような不都合は)、よも(決して有りませんから)」と書いたまへり(そのように光君は御手紙をお書きになったのです)。

入道、例の、喜び泣きしてみたり(明石入道は例によって祝いの使者に感激して嬉し泣きをしていました)。かかる折は、生ける*かひもつくり出でたる(このような祝儀の機会には生きてきた甲斐があったと口を合わせ貝の様にへの字に曲げて泣き顔になるのも)、ことわりなりと見ゆ(無理の無い事と思われます)。 *「かひもつくり」については<「かひ」は「生ける甲斐」と「かひ作る」(べそをかく)の言葉遊び的表現。>と注にある。

ここにも(明石の邸に於いても)、よろづ所狭きまで思ひ設けたりけれど(祝宴の品々を所狭しと豊富に揃えて用意してあったが)、この御使なくは(光君の御使いが来なかったら)、*闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ(中央の要人との縁を示す栄光という華やぎが無い闇の夜のままで暮れてしまった事でしょう)。 *「闇の夜」については<「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は闇の夜の錦なりけり」(古今集秋下、二九七、紀貫之)を踏まえる。>と注にある。この引き歌の「見る人」こそが、祝われる女兒の実父なのだから当然「見るべき人」であり、今を時めく権力者に返り咲いて「十分に今後の面倒を見てくれるであろう」光君である。

乳母も(乳母の宣旨の娘も)、この*女君のあはれに思ふやうなるを、語らひ人にて(女兒の母である明石の夫人が身の程を弁えた感心した人だったので話し相手にして)、世の慰めにしけり(地

方暮らしの憂さを晴らしていました)。 *此処の文について注釈は<『完訳』は「乳母と明石の君を、ほぼ同等に語る。女君の身分の低さに注意」と注す。>としてある。確かに其の様に言えるのかも知れないが、私の素直な驚きは寧ろ「宣旨の娘」の身分の高さである。「めのともし」と主語扱いなのだから同等というよりは「乳母」が「女君」より上位である。「女兒」は后候補だから「乳母」よりは上位に違いない。しかし其の母親は「乳母」より下位なのである。凄惨な身分社会である。帝の側近女房の娘が受領の娘より上流なのは分かる気もするが、「乳母」に成った時点で地位は逆転するのが組織運営上の権威構造かと思うのに、帝の権威は地方組織を無視する。そういえば2009年現在の官僚組織にもこの体質がまだ残っているようで、この国の浦島振りを見るようだ。それにしても明石入道も、家柄は大納言筋で宮内卿筋に見劣りも無く、許より光君の母方の叔父でさえあるのに、中央の帝側近と地方の受領とでは圧倒的な身分違いだったらしい。いや、その<中央集権身分制の感覚>こそが光君が深謀したところの、后候補の「女兒」を仕付ける「乳母」に必要な<資質>だったのかもしれない。

をさをさ劣らぬ人も(この乳母に然程劣らない京の公家筋の人も)、類に触れて迎へ取りてあらずれど(縁故知人を介して明石邸に女房勤めとして迎え入れてあつたが)、こよなく衰へたる宮仕へ人などの(それらの女房は生活苦ですっかり落ちぶれ果てた宮廷人だったりして)、*巖の中尋ぬるが(地方で隠遁生活をする心算が)落ち止まれるなどこそあれ(辛うじて勤め上げている者ばかりだったが)、これは、こよなう子めき思ひあがれり(この宣旨の娘はまるで世間ずれしてなくて子供のように育ちの良さを隠しませんでした)。 *「いはほのなかつぬる」の語り口については<「が」格助詞、主格を表す。出家や隠棲を志していた者が、の意。「こそ」係助詞、「あれ」已然形、逆接用法、読点で、下文に続く。「いかならむ巖の中に住まばかは世の憂き事の聞こえござらむ」(古今集雑下、九五二、読人しらず)による。>と注にある。

聞きどころある世の物語などして(乳母は明石夫人に聞き応えの有る宮廷内の話などを聞かせて)、大臣の君の御ありさま(光君の公職者たる大臣としての権力者ぶり)、世にかしづかれたまへる御おぼえのほども(都中から尊敬されている御評判の大きさを)、女心地にまかせて限りなく語り尽くせば(女心の憧れで膨らませて際限も無く話し続けたので)、「げに(確かに其れ程の偉い人が)、かく思し出づばかりの(このように思い出してくれるほどの)名残とどめたる身も(子供を儲けた我が身というものも)、いとたけく(とても尊いものなのだろう)」やうやう思ひなりけり(と夫人も漸く思うようになりました)。

御文ももろともに見て(乳母は光君の御手紙を夫人と一緒に見て)、心のうちに(内心で)、「あはれ(ああ何と)、かうこそ思ひの外に(このように自分には考えられないほど光君に大事に思われる)、めでたき宿世はありけれ(夫人のような幸せな運命もあるものなのだ)。憂きものはわが身こそありけれ(惨めなのは地方へ下がってきた自分ばかりではないか)」と、思ひ続けらるれど(と思ひ続けられもしたが)、

「乳母のことはいかに(乳母の様子は如何だ)」など、こまやかに訪らはせたまへるも(気遣ってお尋ね下されてもいたので)、かたじけなく(過分に感じ入り)、何ごとも慰めけり(辛い思いなどが慰められました)。御返りには(明石夫人の光君への御返書には)、

「数ならぬみ島隠れに鳴く田鶴を、今日もいかにと問ふ人ぞなき (和歌 14-08)

「こんな田舎で鳴く鶴を、祝ってくれる有難さ (意識 14-08)

*注にく明石の君の返歌。源氏の「蔭にみて」「いかにわくらむ」の語句を受けて「み島隠れ」「いかにと問ふ人ぞなく」と返す。「数ならぬ」は明石の君の身を卑下していったもの。姫君を「田鶴(たづ)」に譬え、「み」に「身」、「いかに」に「五十日に」を掛ける。>とある。「みしま」は殿から「隠れ」た「御島」なのだろうが、「数ならぬ身(物の数では無い私)」の「隠れ(匿い)」と読めば、「深島(奥まって目立たない小さな場所)」の方が合いそうだ。

よろづに思うたまへ結ばほるるありさまを(このように何かと心細く思わせて頂き縁を繋いでいる状態で)、かくたまさかの御慰めにはけはべる命のほども(このように希な御志に御頼り申す命というものは)、はかなくなむ(心許ないものです)。げに(確かに御誘いの様に)、後ろやすく思うたまへ(上京しても安心出来るように思わせて頂くように)置くわざもがな(して下さると助かります)」とまめやかに聞こえたり(と実直に御答え申しました)。

[第六段 紫の君、嫉妬を覚える]

うち返し見たまひつつ(光君が明石夫人の返書を何度も見返しなさっては)、「あはれ」と、長やかにひとりごちたまふを(ああ何とか早く呼び寄せたいものだ)と長く溜息混じりに独り言を仰るのを)、女君、しり目に見おこせて(正夫人は横目に見遣りなさって)、

「*浦よりをちに漕ぐ舟の(浦から遠くへ漕ぐ舟には、私は除け者なんですね)」と、忍びやかにひとりごち(符と呟いて)、眺めたまふを(落胆なさるので)、 *注にく紫の君の詞。「み熊野の浦よりをちに漕ぐ船の我をばよそに隔てつるかな」(古今六帖、浦)の第二句、三句を口ずさんだ。真意は第五句の「我をばよそに隔てつるかな」にある。>とある。「御熊野の浦」は紀伊半島の三重側の熊野灘では無く和歌山側の紀伊水道を言う、らしい。というのは熊野大社詣の際に、京から淀川で浪速へ出てから紀伊路を西回りしたという天皇の御幸こそその「御熊野(みくまの)」なる呼称だからのようだ。伊勢神宮から熊野へ向かう東回りの伊勢路は「みくまの」では無いのだろう。何れにせよ宮処人には紀伊前の海を遠く(をちに)離れてゆく舟は縁遠く思われたか。

「まことは(全くもう)、かくまでとりなしたまふよ(そんな風にお取りなさるとは)。こは、ただ、かばかりのあはれぞや(これはただ流離の時の慰めではありませんか)。所のさまなど、うち思ひやる時々(明石の様子を思い出しては)、来し方のこと忘れがたき独り言を(色々な出来事が忘れられないという独り言を)、ようこそ聞き過ぐいたまはね(よくもまあ御聞き流し下さらないものですね)」など(などと光君は)、恨みきこえたまひて(愚痴られて)、上包みばかりを見せたてまつらせたまふ(手紙の表紙だけを夫人に御見せ申しなさいました)。筆などのいとゆゑづきて(その表紙だけでも実に達筆で)、やむごとなき人苦しげなるを(上流の人も適わなそうなので)、「かかればなめり」と、思す(夫人は是程の相手なら殿の執心も然り有らんと御思いでした)。